

随想

混線模様

林 文子

かいまみる庭に立つ人の動きには優しい詩があり自然の美しい情景がある。近所の屋敷うちを垣根を越えて自由に駆けめぐった幼い日々、そのうちに住む人の息づかいが聞こえるような、暖かく柔らかな自然の温もりが伝わる生け垣。垣根越しに隣人と、ちょっと立ち話をしていた母親達の懐かしい姿も蘇ったりして、生け垣には追憶の糸が絡んで過ぎた日々を映し出し、想いがふくらみ、心が安らいでくる。

最近の住まいには厳めしい石垣や豪華なブロック塀が目立つようになった。住まいに迫ってめぐらされている様は、遮蔽感ばかりの印象が強い。この頃のように高価で狭い宅地では、システム化した企業の建築専門家のセンスに委ねられた建物やインテリア類を採用したほうが短期に幾らか安価に家が建てられるということによるのだろう。

私の逗子の小さな家の隣にも、1年がかりで豪邸が建った。住人はようやく5月に引っ越してきた。最初の隣人は都庁の上級役人の未亡人であった。それなりに結構な住まいであったが一昨年人手に渡った。バブル経済のさなかに、彼女の庭の向こう・南隣（空き地）の1区画内に4軒の建て売り住宅が建てられてしまった。3月程の留守の間に、鼯(イタチ)のすばしっこさにも似た早業(ハヤワザ)の突貫工事のあと、それぞれの家にはもう新しい隣人達が住んでいた。退官を前にした雑用などで、落ち着かない折でもあったので、気がかりながら逗子まで足を延ばすのも億劫な頃であった。やがて隣の未亡人が入院され、しばらくしてその家屋敷が売りにだされた。20数年前マイタウンとして計画造成された住宅地である。1区画1戸建、2年以内建築の条件がついていた。1次～3次分譲であった。1次群は殆どが東京都関係の人達で占められていた。都知事美濃部さんの時代であった。私は分譲が終わり何年か経って、分譲の整理で残った半端な土地を買った。ちょうど聖路加国際病院に勤めていた時である。あとから買った私にはすぐ家を建てるよとの条件がつけられた。1年後になって南隣に先述の都庁の未亡人の家が建てられた。

分譲外に購入した高額の土地に建てた私の家は、分相応に小さなものである

が、可愛らしい夢のつまった家で気に入っていた。隣家との境はお互いの真ん中に低い化粧ブロックの塀で仕切るとの話であった。工事半ばで、話が変わり、既に設けた東（表）側と西側の一部を残して、中程半分は手を加えないままになった。残りの仕切りは隣家側がつくるまで放置された。第一次石油ショックの後でもあり、以前の化粧ブロックは製造中止になった。隣人が移り住んでさらに1年ほど経って、頑なに隣家側に引っ込んで造りたいというにまかせたが、ちがう素材でチクザクにつながった塀の見苦しさは、話の食い違いの象徴であるかのように、お互いの心をひらかせなかった。

ところで、新しい隣家は、当然のここのようにこの境界上の塀を壊し新しい塀を巡らした。取り壊された私の化粧ブロックもいずこへか片付けられたままになった。この頃分かったことは、隣家の豪華な塀で私宅との境をしきった積もりでいたらしい。“以前より立派になった”とのことであった。

スクラップ処理で失った塀のあとのわが家の佇まいはみすぼらしいものになった。かくて20年の風雪に耐えてわずかに残っていた小さく可愛いわが家の面影は全く消え去った。

住環境は自然環境との調和を考慮し、その上周りの人達との関係をも大切にする配慮を何より大切にすべきなのだが、現実に自分が問題を抱えてみると、自分だけは格別の存在のように不遜な、傲慢に近い気持ちで解決策を模索していたのではなかろうかと自問自答するのだが、近年の土地価格の急騰と建設費の高値は、勤勉な市民生活の夢を消した。和やかな隣近所の交流も失われようとしている。

早くから都市に近い丘陵地帯は格好の開拓地として宅地造成されていく中、逗子・鎌倉の丘は見渡す限り住宅地として息づいてしまった。渚通りから見上げる自然が醸し出す美しい四季折々の樹々の眺めは昔語りになってしまった。皮肉にも自然保護を謡いあげながらその自然を破壊して省みないのが現実の社会構造なのだろうか。

（健康文化振興財団理事長）